タイムス選書Ⅱ 4

沖縄の文学

仲程昌徳

一九二七年～一九四五年

縄の文学

昌徳

一九二七年～一九四五年

TIMES SERIES Ⅱ

タイムス選書Ⅱ●4
沖縄の文学　1927年～1945年

定　　価　2,200円（本体2,136円）
初版印刷　1991年3月8日
初版発行　1991年3月28日
著　　者　仲程昌徳
発 行 者　川満信一
発 行 所　沖縄タイムス社
〒900 那覇市久茂地2-2-2
☎098-863-7771
印　　刷　文進印刷㈱
装　　幀　翁長自修

©1991 NAKAHODO MASANORI

沖縄の文学　一九二七年～一九四五年●目次

はじめに　7

第1期　詩の時代　一九二七年～一九三三年　9

1　『詩之家』の詩人たち……11
2　『詩神』の詩人たち……54
3　『詩集』の詩人……70
4　『近代風景』の詩人……83

第2期　小説の時代　一九三四年～一九四〇年　103

1　『文学界』の作家……105
2　『改造』の作家……133
3　『作家群』の作家……161
4　『むらさき』の詩人たち……181
5　『日本詩壇』の詩人たち……207

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第3期　エッセーの時代　一九四一年〜一九四五年　219

1　「大穂樹」と「聖なる日」……221
2　「琉球旅情」と「南島記」……235
3　『むらさき』のエッセー……260
4　『文芸復興』の作家たち……267
5　『文学報国』の詩とエッセー……278
あとがき　293

沖縄の文学

一九二七年～一九四五年

はじめに

何者かになるために地方の者たちが、東京を目指して出て行くという図式は、あいもかわらず続いている。そして、東京は、全てを呑み込み、吐き出し続ける。

沖縄の文学志望者たちも、東京を目指すということでは、その例外ではなかった。例外ではないどころか、東京から遠く離れているぶんだけ、いよいよ、東京への憧れが強く、なにがなんでも、東京へと、彼らをせきたてた。

「沖縄の文学」と題した本書が、沖縄現地における文学活動の動向ではなく、東京での彼らの活動をうつさざるを得ないのも、そのためであり、また、そのことが、逆に、沖縄の文学とは何か、ということをよく語るものになるかとも思える。といって、沖縄の文学とは何か、ということを問うのが、本書の目的ではない。

「沖縄の文学」とは、沖縄出身者の表現になる作品という程度のものである。従って、沖縄で刊行された文芸雑誌や新聞に掲載された沖縄の人たちの作品は、全て「沖縄の文学」であるわけで、それ以上でもそれ以下でもない。であるのなら、わざわざ、東京で刊行された文芸雑誌を調べるまでもなく、現地で発刊されていたのを見れば、いいということはある。無論、それが、第一に

なされるべきことである。しかし、一九二七年から一九四五年までの間、現地で刊行されていた雑誌・新聞の類が、ほとんど消滅し、手にすることが出来ないという事情が、そこにはある。

それゆえ、文学者になるために上京して行った人たちを追うような形で、彼らの残したものを探す者たちもまた、なにがなんでも上京しなければならないということになるのである。

本書が、「沖縄の文学」と銘打ちながら、東京で刊行された雑誌に掲載された作品のみをとりあげていかざるを得なくなったのも、一つには、現地で刊行された文芸関係雑誌がほとんど残されてないという事情、二つには、なにがなんでもと上京していった文学志望者が、実に多くの作品を、東京で刊行されていた諸雑誌に発表していたということと関わっている。

彼らが東京に残した作品の後をたどれば、そこに何かが見つかるかも知れない。そして、その何かが、ひょっとすると、「沖縄の文学」が、ただ単に沖縄出身者の表現したものであるという以上の、何かを見せるかもしれない。そうなることを、願ってはいるが、それよりも何よりも、これまでうもれたままになっていた、彼らの多くの作品を取り上げて見ていきたいというのが、本書の目的である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第1期　詩の時代

一九二七年～一九三三年

1　『詩之家』の詩人たち

一

山口芳光が、詩集『母の昇天』を上梓したのは、一九二九年である。彼は、詩集の評を、伊福部隆輝に依頼した。山口が、一面識もない伊福部に、その依頼をしたのは、伊福部が、当時新進気鋭の批評家として、沖縄にも聞こえていたからであろう。

伊福部は、その依頼を了承し、早速『母の昇天』評をする。彼は、詩集の評を、まず「山口芳光君」と、作者に呼び掛ける形にし、「佐藤惣之助君からと有馬潤君からと二通の音信を受け取った。いづれも『母の昇天』に対する僕の所感を君が希望してゐるからとのことである。僕は君の名は忘れてゐたが佐藤君の序文を読んでゐるうちに、最近琉球が生んだ第一の詩人山之口貘から、君のことはすでに聞いてゐたことを思ひ出した」として、貘の「純情であると同時に鋭い詩人で

ある」という山口評を紹介し、その後で、「だが、山口芳光君」と呼び掛け、次のように評していく。

読過の後、僕の感じたものは、喜びであるよりも寂寥であつた。

ありていに言ふ。この詩集を出すのは早すぎた。これでは、この頃雨後の筍のやうに出る少年詩人詩集といささかも異るものでない。

山口君

この四十六篇の詩中の批評の対象たる資格のあるものは、「前世への恐怖感」「私は天国へいきたふなりました」「神様私の肉体は疲れはてました」「帰省せる幼友達カナへ贈るの詩」「春の空」「病む日」の六篇にすぎない。しかもこれ等と雖も決して上々なる詩とは言ひ難く、ただその方向として正しいといふ程度で推奨に値するものは僅かに「前世への恐怖感」一篇のみである。

山口芳光君

このやうな無シツケな批評は、おそらく君の期待してゐたところではなかつたかも知れない。この辛辣すぎる言葉が病床の君の神経を悪るく刺激しはしないか。それは僕の何よりもおそるるところであるが、しかしおそらく君は、そのやうなことはなからう。

伊福部の苛烈な評は、まだ続く。天分を信じることは出来るが、これまで書いてきたのは詩でも何でもないのだから、全部焼き捨てたがいい、というように。

このような伊福部の評を、山口が、どのような思いをもって読んだか判らない。が、いたく辛いものであったことは確かであろう。

伊福部が、「批評の対象たる資格のあるもの」として上げた六篇のうち、これまでに見ることの出来た『詩之家』に掲載されている詩は、「病む日」一篇だけである。

私を呼んでゐる。
お母さん！
私を招く暗い大きい手をしかつてやつて下さいませ。
私は怖くなり、私は愛しくなり、
私はあなたの白髪がぬぎたうなりました。
そして私はあなたのふところに幼年の日のやうに寝たうなりました。
お母さん！

『詩之家』第四年十一月号（昭和三年十一月）に掲載された「雨二題・その他」七篇の中のこの一

篇を、伊福部は、六篇の中にいれているのであるが、この一篇だけでも、山口が、貘の評したという「純情」な詩人であったことが判るであろうし、また伊福部の評に見られるように「病床」にあったということも判る。

「私を招く暗い大きい手」とは、言うまでもなく「死の影」で、詩人は、それを、母親に追い払ってくれと哀願しているのである。死が、自分を呼ぶ、そういう日々を詩人は、生きている。そして、自分を看病してくれる母親にも疲れが目立ち、そのために、頭髪に白髪がまじり始めているのではないかと、詩人は悲しんでいる。

死への恐怖と母親への愛、「病の日」はそのことを歌ったものにほかならない。そして、詩集の題となった『母の昇天』は、この「病む日」の後にみられる一篇「陽炎」からとられたものであろう。

母、わがために蚯蚓を掘ると云ふ。
されどこの炎天に蚯蚓のゐることなく、
母はいたづらに流涕し
陽炎へる花畑に立ちつくせり！
あ・母は昇天する！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.